



窓

スウェーデン中部
ダーラナ地方の
シリアン湖に佇む少女



Photo/中嶋千絵 (dill com)

「湖とfolkloreの地」と呼ばれる
ダーラナ地方には、6,000もの美しい湖
がある。その中で最も大きいのがシリ
アン湖である。
民族伝統が色濃く残る場所でもあり、
スウェーデンで盛大に祝われる行事の
1つ「夏至祭 (midsommar)」では、世界
中からの観光客が集まる。

スウェーデン社会研究所 所報
No.322
2002年3月15日発行

発行所：社団法人スウェーデン社会研究所
〒105-0013東京都港区浜松町1-8-1
(株)科学新聞社内5階
Tel. 03-5776-1835 Fax. 03-5776-1836
URL <http://www.sci-news.co.jp/sweden/>

発行人・編集責任者：川崎一彦
Publisher&Editor in Chief: Kazuhiko Kawasaki
編集：松元さぎり
Editor: Sagiri Matsumoto

■目次

創立35周年の年を迎えるにあたって	2
ニュース	5
Norway Topic - ニューヨーク・テロ事件の影響よ り/JISSニュース	
JISS連続研究会	8
言語からみたスウェーデンとスウェーデン語 第1回・ スウェーデンは多国籍	

サロン	12
私のスウェーデン観/やさしいスウェーデン語・ ミニ講座-3/Sweden A to Z-Vol.3・スウェー デン・ア・ラ・カルト	
JISSインフォメーション	15
会員動向/イベント情報	

創立35周年の年を迎えるにあたって

創立35周年の年を迎えるにあたって

(社)スウェーデン社会研究所
理事長
松前 紀男

松前 紀男 ● Dr. Norio Matsumae
Chairman of JISS

スウェーデン社会研究所が創立されたのは、昭和42年(1967年)8月31日のことです。発起人総会が国際文化会館で行われ、スウェーデンの社会・経済・法律・政治・労働・教育・外交・国防等、社会全般にわたって、スウェーデンと日本両国間の交流・研究を行うことを目的として設立されました。このことはスウェーデン社会研究所所報No.1に明記されており、また当然のことながら、平成5年(1993年)の4月に発行された『25年の歩み』にも記載されていることです。

この時、開所式では、西村光夫所長により活動説明が行われ、スウェーデンのクリスティーナ王女並びにアルチスヴィスト大使からお言葉をいただき、王女から図書も寄贈されました。そして発足に当たって、スウェーデン政府から約170万円の援助が次年度予算案に計上された旨、喜ばしい報告も伝えられました。このようにして毎月、月報を発行しながら、脈々と続けられた研究所でしたが、時代の変化と発足時に中心となって動かれた方々が亡くなられ、社会の変化とともに、その運営は困難を加えて参りました。

このことについては当時新理事長に就任された故西村光夫氏が、月報24号の1に、次のように綴って居られます。「1967年にスウェーデン社会

研究所の設立案が生まれ、会長に松前重義先生、理事長を大平正芳先生にお願いすることになりましたが、昭和55年(1980年)には大平先生の訃に遭い、松前先生の意向で理事長の任を継ぐことになりました。当時、松前先生は非常にお元気でおられましたので、松前重義会長のもとでつつがなく活動を続けることができましたのであります。資金のあまり豊かでない研究所のために、丸ビルのご自分の事務所の使用を許可して下さったことは、最も重要な、感謝に耐えない恩恵の一つであります。」

1991年8月、その松前重義会長が亡くなられました。西村理事長の強い希望もあって新しい会長には、松前達郎東海大学総長が就任しました。西村理事長は資金の乏しい中、同年10月19日にスウェーデン大使館で25周年記念祝典を催すとともに、月報の24号No.11に、『新しい出発に当たって』と題する、一文を寄せておられます。その中で「25周年に当たり、松前・大平両先生のお姿が拝せなかったこと、わたくしもすでに老年齢にあたっております。しかし今日、社会的にも経済的にも政治的にも、研究所には非常に困難で多様な問題が立ちまわっておりますが、その存在意義は大きなものがあると思います。」



クリスティーナ王女を迎えるための開所式(昭和42年10月23日)。王女より大平理事長へ、書籍を寄贈される。

と述べておられます。

しかしその西村先生(研究所理事長・基金常務理事)も、1993年12月に急逝され、その際本社のために、ご遺族よりご寄付をいただきました。西村先生については月報26号の1(No.282)に、早稲田大学の中嶋博氏が、先生の研究所に盡くされた業績について書いておられます。

西村先生がこの世を去られた後、月報は『Vol.-No.』の表示に加え一冊・一冊を通してのNo.が打たれる様になり、Vol.27-No.1はNo.293となりました。以降この番号が検索用の整理番号として主流を占めるようになりました。そしてその研究対象も、ヨーロッパの大きな変化を象徴するかのように、幅広い視野からの研究が求められるようになったと言ってよいでしょう。この点について松前達郎会長は、1995年の『新年の挨拶』No.293で、次のように述べておられます。「スウェーデン社会研究所が取り扱う分野を、スウェーデンの社会のみに限定せず、北欧諸国や他の隣接したヨーロッパに求め、扱う分野も社会制度にとどまらず、科学技術や文化芸術にまで広がっていくことです。当研究所の改革のためには、研究所の財政基盤の充実も考え活動のあり方によって資金を生む工夫も必要です」。事実この動きは、すでに「日本スウェーデン・サイエンス・クラブ-JSSC」として大使館内に事務局が置かれ、新しい活動が発足していたことを見てもわかります。(具体的にはこのことが、月報No.297〈Vol.27-No.5〉に大きく広報されている)。このようなスウェーデンを取り巻く諸状況の変化は、ヨーロッパ自身が変わろうとする新たな流れであって、武田龍夫氏による『北欧と新国際秩序の形成』Vol.24-No.2、川崎一彦氏による『スウェーデンに於ける新たな地図と地域研究の必要性』Vol.24-No.6等の論考にも示されていることでもあります。宮本太郎氏は『スウェーデンモデルからヨーロッパモデルへ』No.295(Vol.27-No.3)の中で、ヨーロッパ北方地域における新しい動きに注視する必要性を訴えておられます。

このような流れの中で、当研究所には再び困難な問題が生じました。長らく事務所を置いていた丸ビルの取り壊しのため、親しんできた617号室を立ち退かねばならなくなったことです。やむなく研究所は、一時期スウェーデンセンタービル5階に、社団法人日瑞基金とともに移動することになりました。しかし当ビルも明け渡さざるを得ない事情が生じ、事務所の人事も変わり、現在は科学新聞社に事務局を置かせてもらっております。この間に月報はデザインを変え、現在年4回の所報の形で発行を続けて居ります。

2000年3月、当研究所の財政状況の改善と新たな方向性への具体策を練り上げる為、私が理事長に就任いたしました。会報No.315に、その目的と方向性を書かせてもらっており、同時に長い間編集責任者として御努力いただいた岡沢憲美氏に代わり、新たに川崎一彦氏が編集責任者となりました。そして外務省からの要望もあって、開設以来長らくそのままになっていた定款を変更する作業に移りました。その結果については、JISS-No.318の巻末『平成12年度臨時総会から』に概要を報告いたしました。

この総会において新たに常任理事に川崎一彦氏を迎え、新事務局長に池田富士太氏を選びました。またJISS-No.320での、平成13年度理事会及び通常総会の報告を見ていただきますと、新たにスウェーデン大使館科学技術アタッチェをされていた須永昌博氏(現在は常務理事)を始め、4名の理事・評議員が加わり、若い研究者を含めた充実した役員構成となったことがわかります。これにより東京と札幌の両都市を中心に、それぞれ活動の幅を広げることができる体制が整いました。

また財政状況も、会費未納者の大幅な整理を行い、新たな法人会員の入会もあって、以前より好転いたしました。これも皆様方の御理解御協力のお陰と感謝いたしております。

しかし世の中は激しい変化と激動の時代を迎え、容易ならざる状況です。その中に於いて喜ばし

いことは、本研究所の長い間の活動が実って、最近は多くの大学で北欧関連の研究、教育が充実して来ました。このような折、大学中心の連携による活動の必要性に無関心ではおられません。このことに関して、私と日瑞基金の原禮之助会長が中心となり、岡野加穂留理事(元明治大学総長)、川崎一彦・須永昌博両常任理事と5度にわたり会合を重ね、最後に両社団の事務局長とともに、スウェーデン大使を交えて協議を行い、来年度より日瑞基金と密接な協力のもとに歩みを進めてゆくことにいたしました。

このようにこの数年は、苦難に満ちた事柄が続きましたが、新たな展望を求めて、新しい時代に向けての活動を進めてゆくこととなります。

未来への新しい胎動

さて、35年の本社団の歩みを回顧した中で、何人かの方がたから、新しい時代に向けての活動として、貴重な御提言をいただいていることにお気づきと思います。

その中で特に、この研究所の活動を更に広げ、ヨーロッパ北部地域に関する幅広い研究活動の必要性を主張されていることがあげられます。またこの様なご意見は、何名かの理事・評議員との意見交換の中でもしばしば語られてきたことでした。

今年の1月18日に、私を含め3人の理事(私と岡沢理事・永山理事)が、この問題について基本的方向を示すための相談会を、早稲田大学の本部で持たせてもらいました。その結果、永山理事にご足労を願って、活動的な研究者、又会員以外の方がたのご協力も得て、その準備のためのプロジェクトをスタートさせることになりました。それを受けて、若い活力のある研究者が中心となって、未来に活躍を期待される人々の発表の場を創設すべく、学会創立の具体案が検討され、着々と準備が進んでいると聞いております。

この様な活動は、スウェーデン社会研究所から派生した新たな動きと捉えてよいのですが、

組織としては別組織とし、時にはスウェーデン社会研究所、日瑞基金と共同した活動につなげてゆくことも必要だと思っております。

ではスウェーデン社会研究所はどうなるのかという点ですが、次の様な方向性が提案されています。このことは前にも述べました様に、日瑞基金と密接に連帯した行動をとりながら、今までと同様、スウェーデンと日本の交流を通して企業活動や社会活動を基軸とした方向性を持たせ、そのパイプ役を果たしてゆこうということです。

この点についても、スウェーデン社会研究所と日瑞基金の両者の理事になって居られる有志の方がたが中心となって、人事も含め、具体的な検討が始まっております。これ等はスウェーデン社会研究所の新たな時代へ向けての進展であり、今日のような困難な社会状況下にもありながらも、新しい胎動として期待されることです。

近年の経済状況から、どの社団法人や友好団体も困り果てています。その経済的基盤を、少しでも楽にする為の方策を思案中で、すでに或る活動(まだ公には出来ませんが)を開始し、一応の明るさを見い出しております。これが実現すれば、新しい形の学会、また社団の活動として、社会に一石を投ずることになります。是非成功させてみたいと、日々努力中です。

このようなことが未来に影響力ある活動として成長してゆくことを願いながら、今後共会員の皆様の一層のご理解とご協力をお願い致します。

Norway Topic

大橋照美

大橋照美 ● Ms. Terumi Ohashi
ノルウェー体育大学特殊教育分野
障害者スポーツ指導コース卒業。
2001年9月帰国。

ニューヨーク、テロ事件の影響より

●
昨年9月11日、アメリカを襲ったテロ事件は、今もなお世界中の経済不況に影響を与えている。日本でも観光産業だけでなく、金融、貿易、多くの面で打撃を受けている。北欧、ノルウェーでも例外ではなく、特に日本同様、観光産業で大きな荒波を受けた。

ノルウェーといえば、フィヨルド。豪華客船でのクルーズ旅行は観光でも目玉であり、大きなシェアを占める。2001年夏、115隻の大型客船が世界各国よりオスロに到着しており、その乗客の半数を占める約6万人がアメリカ人であったという統計が出ている。9月のテロ事件以降10月の時点で、すでに2002年、夏の30隻のクルーズ旅行がキャンセルされ、よって約3万人のアメリカ人旅行客のキャンセルが考えられる。オスロ市観光庁では、アフガニスタン紛争が長引けば、今後さらに多くの旅行客キャンセルが予想されており、深刻な問題として、世界情勢の動向を見守っている。隣国デンマークでも、デンマーク大手新聞(Berlingske Tidende)によると、10月の時点でコペンハーゲン行き約40隻の大型客船旅行がキャンセルとなっており、観光業関係者に大きな打撃を与えている。

また他国同様、航空業界でも深刻な問題を抱

えている。ノルウェー航空会社(Braathens)では、航空関連、会社全体にかかる保険料が2001年度日本円で約1億5千4百万円であったのに対し、今回のテロ事件が原因で2002年度には、約21億円以上の保険料支払いになることになっている。北欧大手航空会社スカンジナビア航空(SAS)でも、2001年度は約8億4千万円の保険料支払いが、2002年度には約84億円以上と桁違いの額となることになり、航空会社では頭を抱えている。Braathens航空会社では昨年のクリスマス前にすべての航空券に対し80ノルウェークローナ(約1,120円、1クローナ14円で換算)の値上りを実行した。スカンジナビア航空会社ではテロ事件より毎日約2億8千万円(2001年12月7日現在)の赤字となっており、SAS創業以来55年間で2001年度は最悪の業績となり、今後の会社存続、景気回復のため全力を注いでいる。

日本と同様、ノルウェーでもテロ事件直後は海外旅行のキャンセルが相次いだ。そして現在もなおアメリカ行き格安チケットが出回り、まだまだ旅行に不安を隠せないのは、旅慣れしているノルウェー人も例外ではない。一刻も早く、落ちついた世界情勢を望んでいる。

(参考文献: Newspaper:VG 2001/10/24, NTB [VG] 2001/12/7)



バイトストーレン(ノルウェー中部)へ
ワールドカップ・クロスカントリースキー
競技の応援に来ていた子供たち。
[撮影:大橋照美]

News of JISS

JISSニュース

講演会
「北欧における環境と建築デザイン」

平成13年12月4日(火)、スウェーデン大使館オーデトリウムにて、「北欧における環境と建築デザイン」と題した講演会を開催した。参加希望者が定員数をオーバーし、ご参加をお断りせねばならぬ状況になったにも関わらず、快く了承して下さった方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

まず、上松佑二氏(東海大学工学部建築学科教授)により、「スウェーデン・ヤーナの一光景」と題し、北欧の都市における環境と建築デザインは、スウェーデン、フィンランド、ノルウェーそしてデンマークに及ぶ極めて豊かな内容を持ち、それぞれの国に相応しい人間的な都市と環境、建築デザインを展開していることから、デンマークの建築家エリック・アスムッセンのスウェーデン・ヤーナにおける建築と都市、環境デザインに焦点を当てたお話を頂いた。

そして、伊藤大介氏(北海道東海大学国際文化学部北方圏文化学科教授)により、「フィンランド・建築家アールトの遺産」と題し、20世紀の建築や

都市は、モダニズムの考え方を柱として急

激な発展を遂げたが、実は周囲の環境を犠牲にしての発展であったと指摘されることもしばしばであることから、建築家アルヴァー・アールトの活動を中心としてそれを跡づけ、更に21世紀へどのように引き継がれる可能性があるのか、を焦点にお話頂いた。

最後は、小沢徳太郎氏(環境問題スペシャリスト)から、スウェーデンを中心とした環境にまつわるお話を分かり易くお話頂いた。その後、質疑応答の時間を設けたが、予定時間を30分以上経過し、盛況の内に幕をとじた。



上松佑二氏



伊藤大介氏



小沢徳太郎氏

高橋:国際科学技術財団の選考を経て、スウェーデン国際青年科学セミナー(SIYSS)の一環として授賞式に参加できたのです。国際科学技術財団は、毎年学生二人を派遣しており、今年で14年目と聞いて

います。今年の日本国際賞が計算

2人の大学院生ノーベル賞授賞式に参加
国際科学技術財団が派遣

昨年12月10日、博士過程の大学院生新井洋子さん及び高橋昭如さんは、スウェーデン・ストックホルムにいた。100周年を迎えたノーベル賞授賞式に参列し、野依良治・各大学教授らの受賞を見届けていたのだ。リムジンで駆けつけた会場では多くの人々に迎えられ、口を揃えて本当に素晴らしかったという。しかし、そればかりではなかった。会場には、受賞者の人物像がいろいろと現れ、スウェーデンと日本との科学の捕らえ方、考え方の違いをはっきりと見せつけられた形となったという。若い研究者には、世界的な権威のノーベル賞がどう映ったのか。良い経験を日本に持ち帰ったお二人に聞いた。

◎まず、お二人がノーベル賞授賞式に参列できたのはなぜですか。

科学と発生生物学という分野でもあり、選考委員などで関係する教授などに16-26歳の条件で推薦されたようです。それで私たちが応募し、面接を受けて通った。

新井:スウェーデンで“私たちはタイプが似ているね”と言ってたんですよ。やはり世界に挑戦していこうとする情熱と発信力が必要だと思います。

◎ノーベル賞授賞式に実際に出席していかがでしたか。

高橋:世界最高の質だからある程度想像して出席したのですが、やっぱり想像を超えていた部分もありました。でも、驚きというよりもむしろ“さすが”という気持ちで納得してしまう。それよりも、会場に着いて車から降りた時です。一般の市民の方々が大勢いて、“おめでとう”って受賞者を迎えるんです。形は違っても誰でもノー

ベル賞に参加できる。みんなに開かれた賞なんです。国全体でノーベル賞に取り組んでいる。日本国際賞でも皇室の方が出席されますが、この賞がどれだけ日本で認知されているのか。実は私たちが今回このセミナーに参加するまで日本国際賞を知らなかったのですから。早く国民の皆様認知されるように期待します。

新井:授賞式が終わって祝宴へバスで移動したのですが、会場の外にプラカードを持ってノーベル賞に反対する人たちも集まっていました。そんなところもノーベル賞受賞者に見せるわけです。みんながみんな喜んでるわけじゃない、ということも分かって欲しいからあえて規制しなかったのかもしれない。

◎他の場所も訪れたのですか。
高橋:スウェーデンのビクトリア王女に会いました。まず質問されたことがなぜか研究の話なんです。研究に対して興味を持たれて、どんどん突っ込んでくる。“そうなの、大変ですね。頑張ってください”で終わらないのです。

新井:私たちの“目標”ということなんだと思います。とても嬉しかったし、共感を持てた

のですね。もう一度会いたいと思いました。でも一番印象に残っているのは、ノーベル賞の前夜祭です。今年はノーベル賞100周年ということで、たくさんの方の受賞者が集まりました。よく見てみると、たくさんの方が集まってお話をされている受賞者と、そうでない受賞者がいるのです。私たちは英語が達者ではない分、言葉では騙されない。その人の様子を他の部分から見られるのです。集まって話をされている方は一般に“笑顔”と笑い声で一杯なんです。話が終わってその場を離れられても顔がほころんでいる。

高橋:何故、周りに人が集まるのかを考えれば良いと思う。研究を認められているのか、人間トータルとして認められているのかの差がこういうところで現れてくるんだと思うんですね。
新井:白川英樹先生も会場に来ておられて人が集まっていた。私がお婦人としやべっていたら“じゃ、授賞式でまた会いましょうね”って言ってくださった。小さなことだけどやはり嬉しいですね。みんな偉い人だって分かっているんです。その中で、人の集まりで差が現れるのは、その人の人間性

の部分だと思います。

◎前夜祭で受賞者の他に日本人はいましたか。

高橋:新聞社の人たちだろうと思いますが、数人がおられました。でも日本人のところに行か行かないのです。野依先生以外の化学賞の受賞者のところにさえ行かない。つまり、日本のノーベル賞に対する社会的認知が実際のものかどうかと疑問をもってしまう。学術ガチガチではなく、専門的な部分はほとんど感じられない。広く国民の賞である気がしてくるのです。

新井:ノーベル賞のレクチャーを受けた時も、奥さんの写真がでたり、冗談を連発されたりでとても面白い。ディスカッションでも空白の時間がないんですね。“これが本当のディスカッションなんだ”と思いました。なにより会場を和ませます。どんどん引き込まれていく。私がもし何もサイエンスをやっても“科学をやりたい”と思うだろうなと感じました。

◎文化の違いでは。

新井:文化の違いで終わらせたくないです。文化の違いだけだったら絶対その差が分かると思うんです。同じ人間なん

ですから。どの研究者もノーベル賞を取るまでは大変だったはず。でも本当に重要なのは取った後なんです。“偉いだろう”ではなく、“今までのことから次に何をしたいんだ”と言えるかどうかです。これまで研究者に人間性なんて必要ないかもしれないと感じていました。でも偉い人ばかりの中で、ホントのノーベル賞受賞者って一体誰なのだろうと二人で相談していたのです。

◎自分の研究に変化はありますか。
高橋:研究自体で特に変化はないと思う。ただ、研究だけではない部分で、自分がどうして取り組めばいいのか、学術的なものにさらにプラスαのような視野が必要であることに気づかされました。

新井:大多数の研究者の一人である私が、かなり前向きになれたと思います。私を通じてサイエンスを見て欲しいと自信を持って言えるようになりました。
高橋昭如さん●東京大学大学院工学系研究科システム量子工学専攻博士課程2年
新井洋子さん●東北大学大学院医学系研究科器官構築学分野博士課程1年
(2002年1月11日号科学新聞より転載したものです)

言語からみたスウェーデン
とスウェーデン語

第1回

スウェーデンは
多国籍

講師

速水 望

速水 望 ● Ms. Nagame Hayami
東海大学北欧学科非常勤講師●1月26日「第1回研究会」の概要を
事務局にて要約、編集したものです。**主旨**

スウェーデンと言えば、豊かな社会福祉国家、環境問題への多様な取り組み、中立国家などを連想される方が多かったのですが、最近ではサンタクロースの住む国、オーロラ観測のできる国、またスウェディッシュポップが日本市場でも大きな成功を納めるなどして、かつては研究対象国であったものから、現在は若者にとっても身近な国になりました。マスメディアやインターネットの普及により、スウェーデンに関する情報は簡単に入手できるようになったのですが、実際スウェーデン人の住む社会については知られていないことが多いようです。そこでこの研究会を通じて言語から、スウェーデンとは一体どんな社会なのかその内部に迫りたいと思います。

第1回『スウェーデンは多国籍』要旨

移民の流入によりスウェーデン人口の約1割が外国籍であると言われています。北部には少数民族のサーミ人が今も自分達の伝統、文化、言語を守りながら暮らしています。また様々な理由によってスウェーデンに移民してきた集団が定着し、「スウェーデン人」として生活しています。多国籍社会に至る迄のような経過があったのでしょうか。また、多国籍社会が生み出したバイリンガリズムの現状を現地に住むバイリンガルの調査を通して見ていきたいと思っています。

はじめに

今回のような社会言語学的なスウェーデン語というのは、なかなか日本で発表する機会がない。やはりスウェーデン語が世界の中では、少数言語に含まれているからかも知れない。今回発表の機会を持てたことを嬉しく思う。

現在、東海大学をはじめ、スウェーデン語教育に携わっているが、5年程スウェーデンに留学し、北欧言語学を学んだ。また何故そこまでスウェーデン語に拘ったのかと言うと、幼少時代、ストック

ホルムから北上した町・Sandvikenに数年住んだ経験がある。その際、半年程でスウェーデン語を覚え、その後は両親の通訳をするくらいバイリンガルになった。しかし、帰国し日本の学校へ行くと、様々な環境の変化で、覚えた時と同様の速さで忘れてしまった。その様な背景のもと、しかし心の中ではスウェーデンが好きであり、その当時のスウェーデンは今とは多少異なっていた、また滞在していた町も小さかったので、自然の中でのんびりと暮らしていた。そういった自分の幼少時代にバイリンガルになった経験から、興味を持つようになった。

■少数民族について

スウェーデンにはスウェーデン人以外の民族が住んでいる。例えば、北部の少数民族サーミ人。ラップ族と言った方が分かり易いかも知れない。【図A】の太枠1～9番が、サーミ人の住む地域である。サーミ人はトナカイの放牧、繁殖をしているが、かつては遊牧民であった。最近では定住型のサーミ人が多い。あとは、キルナの上流に流れているTorne川、この国境地域に住むフィンランド人などが従来の少数民族である。先程、サーミ人はトナカイの繁殖を営んで生活していると言ったが、1980年の資料によると現在では700人だけがトナカイの繁殖を仕事にしている。彼らの着ている民族衣装、トナカイの角を使った手工芸品はスウェーデンのお土産によく売られている。それらは彼らの作ったものである。サーミ語は小さく分けると1～9つまで、大きく分けると3つの方言がある。先程話した国境付近に住むフィンランド人は、スウェーデンにしながらフィンランド語を話すと言われるが、しかし、フィンランドは1800年にスウェーデンがロシアとの戦争に負けるまではスウェーデン領であった。その様な経緯もありこの付近はスウェーデンの一部であったと考えられている。19世紀の終わりになると、ヨーロッパ大陸では大国主義運動が起こる。これは、一国には同一民族、同一言語という愛国主義的運動

である。その運動に伴いサーミ人も19世紀の終わりまでは自分達の言語を守る事が出来た。以降、ヨーロッパの動きに伴いスウェーデン化されてしまった。このあたりの言語状況はどうだったかと言うと、フィンランド語は二層言語であるとされている。この二層言語とは、1つの社会に2つの異なった言語が話されている。1つの異なった方と言うのは、どちらかと言うと政治的な背景があり、1つの国の言葉がもう1つの言葉より優性になる。そして、方言として捉えられてしまう事もある。公言語というのは、行政や教育などその地域で話されている主要な言葉。そして、家族や友人の間で話される口語が定言語。こういった現象がフィンランド語であると言われている。現在フィンランドの公用語は、フィンランド語が主であるが、スウェーデン語も公用語の1つになっている。スウェーデン語で書かれた新聞や学校の指導言語など、また北欧では早いうちから第二言語を学ぶが、スウェーデンでいうと今はどうか定かではないが、小学3年生で英語教育が始まり、フィンランドではそれがスウェーデン語である。

■ 移民流入の歴史

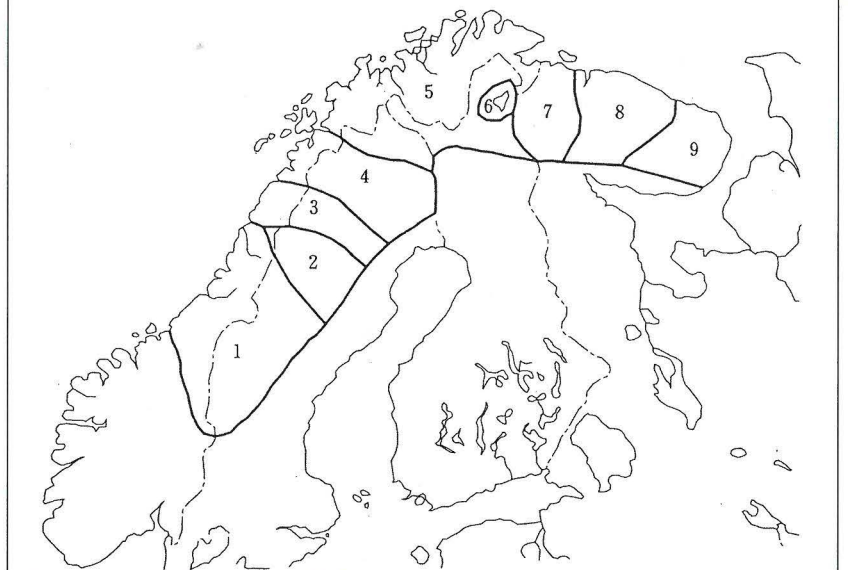
歴史を振り返ってみると、スウェーデンは戦争をしなくなってから200年と言われているが、かつてはしていた。そこで戦争に伴う捕虜、またスウェーデンには大きな鉱山があるがそこでの仕事は危険とされていたので、その時に戦争捕虜を働かせていたとも言われている。まず最初にスウェーデンの移民として、ドイツ人(ハンザ同盟にあるように商業や戦争捕虜)、16世紀にはジプシー、そして16世紀のスウェーデンは大国時代と呼ばれ、領土を広げて大きな国への移行時期でもあり、その当時の労働者として、フィンランド人が多数入ってきた。17世紀になると、スウェーデンでは鉱山側から託された鉄鋼物を製鉄する鍛冶職人を必要としていた為、ベルギーから呼び寄せたワルーン人(フランス語を話していたので、この当時は割とフランス語からの借用

語が多い)そして、ユダヤ人(今まで自分達のアイデンティティーを守ったのはユダヤ人とジプシーである)。

現在スウェーデンには、14,000人程のユダヤ人と3,000~5,000人のジプシーが住んでいる。1870年~1930年の間、スウェーデンでは19世紀的社会的社会不安と呼ばれた時期である。まず、経済



【図-A】サーミ語方言概観(ビョルン・アールセツ著「サーミ民族」、トロムソ博物館)



の不平等と収穫の減少による飢餓。そこで多数(約10万人)のスウェーデン人はアメリカに渡った。(1-アメリカ、2-オーストラリア、デンマーク、ドイツ)。この時期の人口増加率は平均0.6%に下がった。スウェーデン人はある一定期間の冬の間、労働目的としてデンマークで仕事をしスウェーデンへ戻ってきたが、ドイツへ移民したスウェーデン人は、そのまま定住した。当時のスウェーデンへの移民者数は約40万人。

1943年～1960年の間は、戦争による避難民、亡命者、フィンランドの戦争遺児などがスウェーデンにやってきた。1970年をピークにスウェーデンの景気がよくなり、まず人手不足ということもあり外国から仕事を目的とした外国人が増えた。フィンランドの戦争遺児は、5～6歳の時にスウェーデンにやって来て、たいてい14歳になるとフィンランドへ帰って行った、と言われている。第二次世界大戦後、スウェーデンは移民の国として特徴づけられた。最初の大きなグループは避難民であった。戦争が終わる2年前からやってきた、バルト諸国からの移民は約35,000人であった。その後、彼らはスウェーデンに定住した。中でも、エストニア人はスウェーデンにいながら常に自国の文化や言語を守り続けている唯一の民族である。第二次世界大戦中は割と北欧(デンマーク人やノルウェー人)から移住してきたが、終戦後はそれぞれの国へ帰って行った。同じ様にこの期間スウェーデンには他のヨーロッパからも多数移民がやって来た。労働目的とした移民は1950年から始まった。意外かも知れないが、スウェーデンはイタリアと労働協定を結んでいて、まずイタリア人がスウェーデンにやって来た。

彼らはスウェーデンで雇われて仕事をする為だったが、イタリア人と並んでやって来たのは、西ドイツ、オランダ、オーストリア、ハンガリー、イギリスなどの国からである。1970年に産業のピークを迎え、外国からの移民は約73,500人であった。これが第一陣とすると、第二陣は、ユーゴスラビア、ギリシャなどである。確かに多数の移民は流入し

たが、一方で北欧諸国の間には協定があり、1954年に共通の労働市場が締結された。そこでは、北欧の人々は自由に北欧間を行き来できる。そしてその制限が強化されると、今度は北欧以外の人を制限するようになった。すると今まで労働力としてやってきた移民の数が段々と減少してきた。一方、北欧諸国の数は総移民の75%になるが、1975年には再び減少し、1980年代には全体の移民者の内の36%が北欧諸国の人であった。しかし、またこの時期に別の種類の移民が流入した。彼らは、先にスウェーデンに流入した親族である。親族というのは一緒に住む事が出来る権利を持っているので、まだその時は余り厳しい規制がひかれていなかったため、家族が故郷からスウェーデンに来るようになった。そして、亡命者や避難民は自力でスウェーデンに渡った場合もあれば、スウェーデン政府からの援助によって本国を離れてスウェーデンで暮らせるようになった。1970年代の後半、絶頂と言われた景気も落ち着き、そして逆に停滞していった。そうすると今度は逆に労働需要が減少してきた。そこでどうしたかと言うと、スウェーデン政府は先にスウェーデンに住んでいる外国籍の雇用者を確保する事に全力を注ぎ、新しく外国から労働者を募らなくなった。この頃から、外国人に対する規制が厳しくなり、実質的な国境閉鎖が行なわれた。1980年代を過ぎると、今度は難民としての入国希望者が非常に増えた。年間3,000～4,000人の移民を受入れようという案があるが、実際にははととも多い。その理由としてどのような人々かと言うと、南米や中近東などの紛争でその地域に居られなくなった。また、1988年～1989年のソ連邦の解体による地域民、東欧諸国、アフリカにおける内乱等、そういった理由でスウェーデンにやってきた。1980年代の移民数はそれまでの10倍に膨れ上がった。1970年代の後半には外国人も増えてきたので、彼らにバイリンガルの教育をさせようという案がでた。しかし当時はフィンランドからの移民が多数であったので、フィンラ

ンド人を対象にしたバイリンガル教育プログラムが作成された。そして、他の国は同様な速さで出来なかった。何故かという、国籍でいうと他に150カ国の異なる民族がいたのでまかないきれなかった。1996年の資料によると、スウェーデンに住む国籍の約53万人が外国人、総人口は880万人であり、約4.6%を占めている。しかし、考えなければいけないのが、かつて移民として入ってきた人がスウェーデン人になる、つまり帰化をする、あとは永住権を求めてスウェーデン国籍を取得した人を入れると数はその倍になる。それでその内訳は、北欧諸国の移民は17%、その他36%。そして、他のヨーロッパ諸国から31万人、アジアから21万人、その他の地域等で総計101万人。これはスウェーデンの人口の約11%として考えられる。この数年は、難民、亡命者、中近東、イラン、イラク、レバノンからの移民が急激に増えたと言われている。彼らはスウェーデン人と同じように生活をしている。

■何故外国人はスウェーデンに居続けられたのか

スウェーデンは、非常に中立国でもあるが、外国人に対してスウェーデン国民と同じ権利を与えることをモットーにしている。特に、法律や行政上での公平、信教等の自由の保障を与える、またスウェーデン語の教育や子供達には母国語教育を与える、という方針で進めている。彼らが1番重要であると考えているのは、全ての人が同じ権利を持つ、つまり平等の精神である。先程お話しした移民達以外に、スウェーデンでは養子縁組をする夫婦が多いのだが、子供達をアジアやアフリカ、今では南米からの子供達がスウェーデン人として入ってくる。移民の子供を育てていく上でスウェーデンでは、特に教育に力を入れている。外国から入ってきた子供達の問題点を何か挙げると、例えば戦争を経験している為の情緒不安定、母国で教育が続けられなかった、または学校へ行けなかった等である。子供達を育てていく為に様々な手段が取られている。まず



研究会の様相

移民がスウェーデンに来ると、どのような過程を経てスウェーデンでの生活を始めるかという、まず窓口を経て、一時的に収容所に入る。その間に、各自の希望する地域を述べられるが、大抵は親類の住む地域を述べるケースが多い。現在は、圧倒的に大都市を希望するケースが多い。そして数ヶ月するとそれぞれの市町村に配属される。大人にもスウェーデン語教育の権利を与えられる。外国人の子供に対して、小、中、高校では母国語教育をすることが可能であり、本人の意志により、本人が希望しなければ受けなくても良い。重ねて特別なスウェーデン語教師をクラスとは別に受ける権利がある。そして子供達の為のカウンセラーがつく。スウェーデンの両親は通常共働きなので、放課後はレクリエーション施設や託児所の指導員なども配慮されている。子供を指導する立場の人が1番大事だと考えられているのは、スウェーデン語ではなく、子供達の母国語維持、更には向上に力を注いでいる。また、必要最低限度の事だけではなく、スウェーデン社会についての知識の全てを与えることにも心がけている。指導者の課題として、子供の個人情報を確認し、通訳を雇う場合もある。望ましいのは指導者も子供の母国語を多少でも解し、クラスの雰囲気を作ることも求められている。

●「第1回研究会」の特に前半部分を掲載致しました。
全文はJISSホームページ
<http://www.sci-news.co.jp/sweden/>
にて御覧頂けます。

サロン ▼ 私のスウェーデン観

やさしいスウェーデン語ミニ講座③

私のスウェーデン観

石田 昭

JISS会員

石田 昭 ● Mr. Akira Ishida

私は昨年6月に、27年間勤めたスカンジナビア航空を早期退職しました。随分と長い間(振り返ってみれば、そんなに長いと言う感じでもないのですが)勤務していましたが、本当の意味で北欧(主にスウェーデン)に興味を持ち、また深く拘わりだしたのはこの十数年ほどです。それまではごく一般的な認識しかなかったな、と今からすれば思います。

北欧と言えば一般的に高福祉で豊かな生活の国、と云うのがごく普通の印象で、特に旅行好きの人にとっては、夏の“フィヨルド”が有名です。しかし、私が北欧に深く拘わるようになったのは、冬(しかも北極圏)のスウェーデンが始まりです。何故?!!それは、“オーロラ”との出会いが始まりでした。今から十数年前、北欧へは夏でこそ多数の旅行客がスカンジナビア航空に乗っておとずれていましたが、冬の北欧は正に“猫またぎ”??つまり誰も見向きもしない状態!!でした。我々スカンジナビア航空の営業社員は、「何とか冬の北欧を商品として売れる企画は無いだらうか!!?’と、いつも考えていたものでした。そのような時、スウェーデン観光局のある人(この人とはいまだに友人付き合いで、いろんな意味で影響を与えてくれている人なのですが)が、「スウェーデンの北極圏に面白いところがあるから見に行ってみないか?」、「勿論、北極圏の冬だから運がよければ“オーロラ”を見るチャンスがあるよ!」と、提案してくれました。チョット面白そうだな!と思い、軽い気持ちで出かけて行きました。丁度4月中旬を過ぎた頃だったのですが、行ってみるとそこはまだ一面“銀世界”!!そして、何と!全て水でできた建物まで(勿論真冬では無いので少し溶け始めていましたが)。彼らはそれを、“ICE-HOTEL”と呼び、実際12月中旬から3月末まで水の部屋、水のベッドで宿泊できる!と言うのです。「これは面白い旅行商品ができる!!」と、勝手に思い込んで現地の彼らに企画を持ちかけ、交渉を始めました。それに、そこから100KMほど離れた所にもスキー場のリゾートがあり、「この二つのコンビネーションで面白い冬のリゾート商品になる!!」と、現地の彼らと協力をして、何とか商品としての販売企画にまでこぎ着けました。日本へ帰り、旅行代理店の人たちに売り込みにかかったところ、「そんな遠いところ!!」、「そんな寒いところ!!」、「一日のほとんどが夜みたいなの!!」等等、否定的な反応がほとんどでした。しかし、こちらも負けずに屁理屈(勿論うそではないですが)で返しました。「遠いと言うのはヨーロッパと言えば皆さんは、ロンドン、パリ、ローマ、フランクフルト等をイメージするからで、飛行機の飛ぶルートから考えると北欧は日本から最短距離の地点なのです!!」、「そう、冬ですから寒いのは当たり前で、しかし北欧はノルウェー側に流れ込んできているメキシコ湾流の影響で、緯度から

考えると皆さんが思っているよりはるかに温暖なんですよ!!」、(実際は、それでも結構寒くて真冬にはマイナス10~15度くらいにはなりますが)「暗いからこそ運良く晴れたら“オーロラ”を見ることができるんですよ!!」等と説得してまわり、それでも数社は旅行商品を作って売り出してくれました。

1年目こそ50名足らずの集客でしたが、2年目にはそれが100数十名の集客となり、徐々に注目を浴びる商品となって行きました。今では対象範囲も広がり、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、グリーンランドまでを含む“オーロラ”旅行の商品となり、年間(冬の期間)5,000~7,000名前後の旅行客が訪れるようになりました。勿論、私1人の力などではその様な大それた事ができる筈は無く、現地の人々、そして同じ業界の非常に強力な人物(北欧の主と呼ばれる人)そして旅行業界の多数の人たち、そして何にも増して時期的な好運にも恵まれた事が非常に大きいと思います。

“オーロラ”と言うのは、自然現象で太陽の活動と深い関係があると言われ、5~10年周期くらいで活発になったりおとなしくなったりするようです。丁度それが好運にも、活発化するタイミングにも合ったようで、本当に何かの縁の様に思います。この事がきっかけで旅行商品としてだけではなく、北欧の色々な点に興味を持ち始め、また様々な人とも知り合って、今では何か半生以上北欧と拘わってきたような気がするほどです。

特に友人に関しては色々な面で世話になり、影響を与えてくれる人が多く得ることが出来ました。仕事を通じて、と言う事に限定して北欧・スウェーデンの人達に対する印象を言えば、組織のリーダーの人たちは、非常に考えが整理されていて、できる限り何でも物事を前向き(PPOSITIVE)に考え、処理しようとするようです。反論があり可也激しく議論となっても、必要以上に感情的になる事はあまり無く、常に冷静に理論的であろうと努力しているように思えます。リーダー以外の人たちでも、個人的な観念がはっきりしていて、権利主張は結構強く、それに伴い責任に対してもしっかりと認識していると思います。(勿論そうでは無い人も多々いますが)ですから、何か新たな目標に向かって話し合う時も、理論的に話が進み結論は出しやすいし、変に感情的にもつれる事が少ないように思えます。多分、国・風土・歴史と色々な要素が原因となっていると思いますが、私個人はあらゆる面で(運が良かったのでしょうか)、出会った人の殆どが北欧・スウェーデンの印象を良くするような出会いばかりでした。今現在に至るまで、多くの人たちと素晴らしい友人関係を続けてもらっています。今回スカンジナビア航空を早期退職はしましたが、これを転機として更により良い関わりを深めていき、何

か日本と北歐の間で役立つ事が出来ればと思っています。その手始めとして、今回JISSに入会させていただきます。そして、非常にヨチヨチ歩きですが、昨年からはスウェーデン語の勉強も始めました。何が出来るのか自分でもまだはっきりと解ってはいませんが、とにかく歩き出してゆきます。

付録●上記の“ICE-HOTEL”のある場所は、スウェーデン北極圏のキールナと言う町(ストックホルムから国内線で約90分程のところ)の空港から、車で15～20分くらいのユッカスヤルビというリゾート地で、今では夏の間も大きな冷却庫を立てて、その中で“ICE-BAR”などが楽しめるようです。最近では、世界中から観光客が集まってくるくらい有名になっています。ユッカスヤルビでは、スノースキーターサファリ、犬ぞりツアー、サーメ人(ラップランド人)文化博物館等、色々珍しいものが楽しめます。

もう一つのスキーリゾートは、ドゥンドレットと言う場所で、そこはアルペンスキーとクロスカントリーの両方が楽しみ、また近くのイェリバーレと言う町は、キールナと並んで約100年ほど前から鉄鉱石の産地・鉱山として栄え、昔は露天掘りでしたが、環境保全の面から現在は深さ1,000メートルにも及ぶ地下坑道が出来ており、その地下には食堂・売店・救急病院などを備えているほどで、ちょっとした地下の町といった感じです。また、この鉱山は手続きをすれば、地下に降りて見学も出来るようです。このドゥンドレットのスキー場からは、93年度ワールドカップでイタリアのトンバを破って総合チャンピオンになった、トーマス・フォグデがでた事でもスウェーデンでは有名です。

キールナの町とイェレバーレの町は鉄道でも結ばれています。この鉄道は、“オフトバーナン”と呼ばれ、元々スウェーデンのバルト海側のルーレオと言う町から、ノルウェー側のナルビックと言う町までつなぎ、産出した鉄鉱石を双方の町を通じて運び出す為に敷かれた鉄道で、今現在でも運んでいます。それが生活路線にも利用されていて、場所がら現在では年間を通じてリゾート観光地を訪ねるために、非常に便利な鉄道となっています。路線沿いには、アービスコ国立公園(ラップボルテンという非常にユニークな形の山が近くにある)や、夏の初めまで滑れるリックスグレンセンと言うスキー場などがあります。その他にも、この路線沿いには色々な珍しいものが楽しめる場所があります。

◎その他詳しい情報は、スカンジナビア政府観光局で入手可能です。

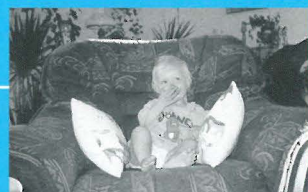
◎個人的にもっとこの地域のことを知りたい方は、私のE-Mailにアクセスしていただいても結構です。

[E-Mail] akiraishida@mbi.nifty.com



やさしいスウェーデン語 ミニ講座③

Coffee Break



スウェーデンの長く厳しい冬も、ようやく折り返し地点となってきているのではないのでしょうか。春を告げるポスク(復活祭：毎年3月21日以降の満月の後にくる最初の日曜日)が近づくと、町のあちこちには、色とりどりの花が売られ、目を楽しませてくれます。

【曜日：veckodagar】

月曜日：måndag(モンダ)

火曜日：tisdag(ティースダ)

水曜日：onsdag(ウンスダ)

木曜日：torsdag(トゥーシュダ)

金曜日：fredag(フレダ)

土曜日：lördag(ローダ)

日曜日：söndag(ソندا)

【月：månader】

1月：january(ヤヌアリー)

2月：februari(フェブラーリ)

3月：mars(マシュ)

4月：april(アプリル)

5月：maj(マイ)

6月：juni(ユニー)

7月：juli(ユーリ)

8月：augusti(アウグステイ)

9月：september(セプテンベル)

10月：oktober(オクトーベル)

11月：november(ノヴェンベル)

12月：december(ディセンベル)

今日は何曜日ですか? : Vad är det för idag?(ヴァ エ デ フォイダーグ?)

木曜日です : Det är torsdag(デ エ トウシュダ)

楽しい復活祭を! : Glad Påsk(グラッド ポスク)

ありがとう、あなたも! : Tack det samma(タック デ サンマ)

Sweden A to Z
Vol.3

スウェーデン
ア・ラ・カルト

東海大学北欧学科
非常勤講師

速水 望

速水 望 Ms. Nagame Hayami



男性が乳母車を押して、子供をケアしている姿が街の中の日常光景の1つ。

『言語界からみた男女平等化について』

現在スウェーデンは女性が社会に進出している国、男女平等の国として知られている。実際100年前と比べると女性の地位は目覚しく向上し、社会で活躍する女性も増えつつある。男女間の格差は縮まってきたというものまで至る所に不平等が残っている、というのが現状である。彼等は男女平等化を目指して、様々な分野において平等化の必要性を唱えているが、ここでは言語界から見た男女平等化について取り上げてみたい。

- 1) *Man måste lämna tillbaka boken inom en vecka.*
「その本は一週間以内に返却されなければならない」
- 2) *Om han inte kan lämna tillbaka boken inom en vecka, så får han böte.*
「もしその人がその本を一週間以内に返却出来なければ罰金を払わなければならない」

スウェーデン語では一般的な事実を表すときに非人称構文を用いたり「人は」という意味を持つ *Man* という語を主語にもってくる。という訳で1)の文章の様に特定の人物を指していない場合に使われるのだが、*man* には「男」、「主人」という意味がある。また2)の *han* 「彼」を使うのが主流である。しかしながら、女性の影が薄くなるという危惧からであろうか、男性、女性の両方共、というのを強調させる為に *han/hon* 「彼あるいは彼女」と書く場合もある。例えば、単数形の “*han*” を避けて常に複数形の “*de*” を使用する方法である。その他には、“*hn*” と書いて読み方は読み手にまかせるという方法や *den* (代名詞「それ」、「その人」を表す) にならって “*hen*” と書くのはどうかと考えられている。しかしながら問題点も残される。“*hn*” と書いて実際に *han* と読ませたい時にはどうすべきか、また “*hn*” はどう発音されるべきなのだろうか。語形そのものを変えることは出来たとしても、男女平等である社会を築き上げるには時間がかかることであろう。

次に職業や国籍に関する語も改善の必要性があるかどうかと議論が進められている。職業や国籍を表す語には本来その形を一つしか持たないもの、例えば “*rådman*” 「地方裁判所判事」 “*engelsman*” 「英国人」等と、仕事に従事している人が女性か男性によって語尾が女性形か男性形に変わるもの、例えば「先生」を表す *lärare* (男性) *lära* (女性)、「給仕人」を表す *servitör* (男性) *servitris* (女性)、「レジ係」 *kassör* (男性) *kassörska* (女性) 等いくつかある。議論の争点になるのは、1) 本来その形を一つしか持たないもの、例えば、“*rådman*” 「地方裁判所判事」の語尾は先ほども触れたが、“*man*” という「その人」「男」、「主人」を

表すものであるが、対象となる人が女性の場合もそのままの形を使い続けるのか、ということである。例えば、“*Hon är engelska.*” 「彼女は英国人です。」確かに文法的には問題はないが「男性」を表す “*man*” に対する「女性」 “*kvinnna*” という語が存在するからこそ違和感を感じてしまうのかもしれない。もちろんのこと “*Hon är engelskvinna.*” 「彼女は英国人女性です」ということはできない。Teleman 氏は長い歴史の間、公的な場で仕事に従事していたのは常に男性だったので、男女共通の名称の必要性はなかったのではないかと述べている。

疑問として浮上したのは公的な場に女性が現れ、それまで男性のみが行ってきたことを女性も同じように行うようになってからである。職業や国籍を表す言葉は本来一つしかなく、後になってその職業に就いている人が女性であると強調する為、語尾に *-ska, -ös, -inna* を付けたり、職業を表す語の前に「女性の」という形容詞をつける方法、例えば *kvinnlig teolog* 「女性の神学者」も導入されていった。そういった流れにそって、今後は逆に「男性の」と強調したい場合には *manlig* 「男性の」という形容詞がつけられるようになった。日常的には女性を表す語尾を用いた表現は問題なく使われるが、公の場では女性を表す語尾は廃止された。

Min lärare väntar barn i vår.
「私の先生は春に子供を産む。」

この文章を読んでどんな印象を受けるだろうか。「私の先生(男性)は春に子供を産む」と一瞬、違和感を覚える人もいるのでは、とTeleman氏は見ている。それでは、

Min lärarinna väntar barn i vår.
「私の女の先生は春に子供を産む」

と書き換えたらどうだろうか。先程も簡単に触れたが、女性形は公の場において廃止され、たとえその語尾が *-man* であったとしてもその形を使う。よって「先生」を表す場合は *lärare* が正統であり、女の先生だからといって *lära* を使うとかえって古語的なニュアンスをもってしまい、*Min lärarinna väntar barn i vår.* と書いてしまうとその先生が若く無いと言っているようにもとれかねない。理想の社会とは社会生活において男女共に積極的に参加し、各々の持っている価値観を尊重しあい、互いに理解を深め合うことの実現ではなからうか。男性優位とされる現在の社会において、そんな理想的な社会を築く為に、男女平等を主張するのは非常に大事なことに思えてならない。

●参考文献

『Teleman, Ulf. 1995. Han, hon eller ven som helst. Språkvård 1.』

事務局より

JISS
インフォメーション

会員の動向

【新規会員】

●個人会員

服部栄三郎、右高清、石田昭、
北村光子、富山ゆりか

●学生会員

大北秀明、藤井亮二、上田ゆり

【退会会員】

〈名称省略〉

個人会員(9名)、学生会員(1名)
法人会員(3社)

イベントの御案内

■連続研究会

「言語からみたスウェーデンとスウェーデン語」

様々なテーマを取り上げた連続研究会も残すところあと2回となりました。第1～2回とも大盛況のうち終了しました。会場の都合上、定員数に制限があり、ご迷惑をおかけしておりますが、参加希望者お申込みが後を絶たない、という事務局としては嬉しい悲鳴をあげております。お席の方も若干数確保出来ますのでお早めにお申込み下さい。

日時●3月30日、4月20日 土曜日

13:00～14:30(開場 12:30より)

会場●JISS事務局 イベントルーム

講師●速水 望(東海大学北欧学科講師)

参加費●JISS会員・スウェーデン語受講生/無料

一般/各回500円(当日、事務局にて徴収させていただきます)

要予約●お電話、FAX(返信用FAX用紙をお持ちの方はそれを使用願います)、メールにて承ります。メールでのお申込みは、特定の形式はありません。「連続研究会参加希望」と明記し、参加希望日、氏名、住所、電話番号、メールアドレス、参加人数(複数の場合は、代表者以外の方のお名前のみお知らせ下さい)を記入の上、事務局まで送付下さい。尚、お申込みをせず直接会場にいらした場合は、定員等の都合上、お断りする場合がありますのでご了承下さい。

【テーマ】

第3回「インドヨーロッパ語から現代スウェーデン語までの道のり」

インドヨーロッパ語からどんな過程を経て現在のスウェーデン語になったのか、言語史を辿ります。又、言語は社会を反映するものと言われていますが、現代スウェーデン語はどのように特徴づけられるのでしょうか。その理由として考えられる「外国語の影響」、「口語と文語の融合化」等についても触れていきたいと思えます。

第4回「北欧語の中のスウェーデン語」

南北に長い国スウェーデンには日本と同様、様々な方言がありますが、南北どのように違うのでしょうか。又、地域による言語の違いを考えていく上で、他の北欧語との関係：どんな言語が存在するのか、姉妹語と言われているデンマーク語やノルウェー語とどのくらい類似しているのか、スウェーデンフィンランド語について触れてみたいと思えます。

編集余話

●元気に北欧諸国の経済産業が、最近世界的に注目されている。景気回復と財政再建の「二兎を得た」モデルとしても、アングロサクソン型の市場原理至上主義に代わるモデルとしても注目されている。

世界経済フォーラム(WEF)が昨年10月に発表した経済競争力ランクによれば、日本が21位で低迷しているのに対し、フィンランドが米国を抜いて1位に躍り出た。他の北欧4ヵ国もすべて16位までにランクされている。北欧研究者にとっては責任重大だがやりがいのある時期である。

(川崎一彦)

●冒頭にてJISSの歴史と今後について理事長がお書きくださった。由緒あるこの団体に、微力ながらも関わったことに再度感謝をし、日瑞間の交流と発展に今後とも太いパイプ役として存続してゆくことを、スウェーデンに興味のある人間の1人として願うばかりである。さて、アジア史上初日韓共同開催であるサッカーの祭典、ワールドカップまで残すところあと2ヶ月となりました。スウェーデンチームは、予選を1位で通過し、順調に勝ち進んできました。94年アメリカでのワールドカップでは、堂々3位の記録を残し、「スウェーデンは高さだけ」という、いじわるな噂も消し去ってくれました。今回は、死のグループと呼ばれ、優勝候補のアルゼンチン、イギリス、そしてアフリカでも強豪のナイジェリアとのFグループです。対戦国は、まず6/2日:埼玉スタジアムでの対イギリス、6/7日:神戸スタジアムでの対ナイジェリア、6/12日:宮城スタジアムでの対アルゼンチンです。グループ上位2チームが本選へ勝ち進むわけですが、スウェーデンは94年の快挙を再現出来るでしょうか。個人的には、よほどの番狂わせがない限り、グループ突破は難しいでしょう。勿論、スウェーデンチームに頑張ってもらいたいとは思いますが、この期間、おそらく沢山のスウェーデン人サポーターが日本を訪れることも考えられます。スウェーデン語で、「Hej!」と挨拶をし、「Lycka till!(頑張って)」と言うだけで、はるばるアジアの片隅までやってくるサポーター達にとって、嬉しい交流の1つになるのではないのでしょうか。そんな些細な一言が、意外と一生残ったりするものです。

Lycka till Sverige! (Matsumoto)



イベントの御案内

■ 106回目 スウェーデン語講座開講

● 入門コース短期集中講座

(4/2~5/28、毎火曜日 18:00~19:30)

● 入門Aコース

(4/6~5/25、毎土曜日 11:00~12:30)

● 入門Bコース

(4/6~5/25、毎土曜日 12:40~14:10)

◎詳細をご希望の方は、事務局までお問合せ下さい。

■ 第2回座談会

「スウェーデン人からみた日本社会と、日本人からみたスウェーデン社会(仮題)」

“私たち人間は自分の顔を直に見ることは出来ない。それを見るためには鏡の力を借りるしかない。民族や国家についても同じことが言えるだろう。” チベット人であるペマ・ギャルポ氏の言葉です。

この言葉に全てが集結されていると感じます。つまり、我々が我々自身を客観視するには、異なる立場からの意見が的を得ていたりすることがよくあります。日本在住のスウェーデン人と、スウェーデンを訪れた、また滞在経験のある日本人(スウェーデンや北欧諸国に興味のある方も勿論可能)を囲んで、フランクに両国の相違点をディスカッションしたいと思います。例えば、日本では雇用募集の1つとして、“18才から25才までの女性”という要項をよく見かけますが、スウェーデンでも“このような”条件があるのだろうか??? また、スウェーデン人が日本企業で勤務する際、日本社会特有の年功序列を知るそうです。両国への素朴な疑問などをこの機会に、皆さんと一緒にワイワイと語り合いたいと考えています。専門的な知識は一切必要ありません。ただスウェーデンに興味がある方、ぜひご参加ください。

日時●5月上旬

会場●JISS事務局 イベントルーム

◎詳細は追ってご案内いたします。